図９：自然への抵抗としてのエンジニアリングと芸術（１）

#9.1

自由エネルギーの最小化としての葛藤の解消の帰結として、
人間は自然を予測可能なものとするために、
・自然についての知識を体系化し、
・その知識に基づいて自然を制御する制度や仕組みを構築する
（＝「エンジニアリング」）。

from #8.2

to #10.1

#9.2 エンジニアリングが持つダイナミズムは、
四つのディスクールを用いて表現することができる。

from
#9.9
&9.10
&9.11
&9.12

#9.3 このダイナミズムは、
エンジニアリングによる捕獲を逃れる
不確実性としての対象aにより駆動される。

#9.4
エンジニアリングがどれほど発達しようとも、
不確実性としての対象aが根絶されることはない。

#9.5
不確実性と直面する機会を積極的に織り込むことで
エンジニアリングのダイナミズムを活性化させて、
より良い満足を生みだしていこうとする思想を
「アジャイル」という。

#9.7 残留する対象aは
トラウマ的な体験として反復強迫するが、
それを「美的」に解消する試みが「芸術」である。

#9.6 自然界において、
未来を厳密に予測しきることは
不可能であるため。

#9.8
美的とは、
「将来における対象aの発生を防ぐための
エンジニアリング的機能を持たない」
という意味である。